



おすすすめの一冊

三橋祐子『産業保健スタッフのための地域保健との連携実践ガイドブック』

中谷 淳子

なかに じゅんこ
産業医科大学産業保健学部 産業・地域看護学教授、看護学博士
1995年産業医科大学短期大学専攻科を修了後、京都にて産業保健師として活動。2002年より教育に従事。日本産業衛生学会産業看護部会幹事、日本産業看護学会理事。

『地域保健』と『産業保健』の連携の必要性はわかっているが、何をどう始めればよいのかわからない。本書は、そんな疑問を解決するための、現場に即した実践的なガイドブックになっています。

2005年に厚生労働省から地域・職域連携について最初のガイドラインが出されましたが、その後、全国で取り組みが広がったかといえれば決してそうではなく、自治体間で差が生まれている現状にあります。地域保健から産業保健に活動の場を移した著者は、当時は一企業の産業保健師という立場で、事業所所在地である市役所と保健事業連携推進協会を立ち上げ、それ以来地域・職域連携の実務や研究に携わってきました。本書はこれらの実体験や研究から得た知見を、総論、各論、実践事例の3章に分け、主に産業保健スタッフに向けた形でわかりやすく解説しています。

まず第1章の総論では、改正ガイド



産業保健スタッフのための
地域保健との連携実践ガイドブック
三橋祐子 著
保健文化社

ラインのポイント解説に加え、地域・職域連携の必要性について現在の日本の企業や労働者が持つ課題——高齢化と両立支援、介護問題、新型感染症対策、精神保健対策、健康経営の視点で述べられています。ここから、地域・職域連携が、公衆衛生を担う専門職にとって必須の活動であることが理解できます。

第2章では、連携の実践に向けた具体的な活動方法について、日頃の準備から社内調整、個別支援と集団支援別それぞれの連携活動例までを順を追って丁寧に解説しています。各項で、実際に取るべき行動がスモールステップでチェックリスト化されており、「これならできる」「やってみよう」とすぐにでも動き出したい気持ちにさせられます。実際にこのリストに沿って行動すれば、連携のハードルはかなり下がるとは思いません。さらに、産業医や保健師が雇用されていない事

業場での実践例も解説するなど、細かな配慮が行き届いています。

第3章では、母子、成人、高齢者、精神、その他の領域別に、合わせて24ケースもの豊富な連携事例が紹介されており、参考になるケースが最低一つは見つかると思います。先人達の経験やアイデアが詰まったこれらの事例から、支援対象者・集団にとって職場も家庭も地域も大切な生活の場であり、それぞれの場で切れ目なく支援が行き届くことの重要性が学べます。

本書を読んで改めて感じたことは、地域、職域、学校などで健康支援に携わる専門職は、それぞれが相互に貴重な資源であり、情報や技術を共有し連携することは、公衆衛生専門家として必須の活動であるということでした。「そうは言っても難しい」の言葉をやさしく飲み込ませてくれる本書は、地域保健、職域保健に従事するスタッフ全員が一読し、ぜひとも手元に置いてほしい一冊です。